

## 4. 現代の学生の精神衛生

一橋大学保健センター教授・所長 稲村 博

最近の大学生の精神衛生についてということですが、私がかれこれ30年ぐらい学生相談とか保健センター関係の仕事に携わっておりまして、一橋の前は筑波、その前は東大の保健センターに兼務で勤めておりました。大学差もございますけど、むしろもっと大きいのは時代の流れといいたいでしょうか、その差が大きいように思います。最近、五月病というのはあまり見かけなくなってまいりました。以前はかなり多くてその対策に苦慮していたわけですが、最近はあまりいなくてむしろリズムにあげた後の方が重要になってきています。

### 五月病とモラトリアム

五月病というのは総括的な名称で、初めは日本でつけられ、俗称で言っていたものがいつのまにかあたかも学術用語の様に使われております。主として鬱状態の人たちで、それに多少周辺の問題も一緒にからめて5月ごろに発生する学生たちのメンタルヘルス上の問題というような意味でこういう用語を使っております。最近減った理由はいろいろとあると思うんですけども、全体としてはもっと根の深い深刻なことがより多く起きようになってきたものですから、五月病の様に反応性の一時的なものはそれほど出なくなったというような説明がされております。

一方、よく問題になりますのは、モラトリアムですが、これも俗称的に使われていたのが社会で広く使われるようになりました。大学生でいえば、留年を繰り返しているような人の一部がこのモラトリアムに当たると考えられているわけです。常習留年者というかそのために卒業も危なくなってしまう。この大学にも在学8年ぐらいの人がおられてその8年目に卒業しないと自然退学になるというわけでどうすればいいかということに苦慮しているわけです。そういうのは極端な方としま

しても、この大学でいうと小平の段階でかなり長く留っているというような人もいるわけです。モラトリアムというのは、従来は、欧米で他の意味に使われていて、執行猶予という意味です。裁判の時に執行猶予付きの判決が下ることがありますけれども、その事を法律用語でモラトリアムと言ったようです。それを精神医学者でかつ心理学的な業績も高い、「アイデンティティ」で有名なエリクソンなどが比較的近年になって使い始めました。それが日本などでも取入れられて一般的に広がったものです。

エリクソンが使い出した意味は必ずしもまづい意味ではなくて、発達段階を経て青少年は成長していくわけですけども、前段階の発達課題を達成しないと次のところになかなかスムーズに進めませんので、次のところに行くまでに時間がかかる人がいるわけで、そういう人をモラトリアムと呼んだわけです。特に青年期の発達課題で重要なものはアイデンティティの獲得で、自分の生き方だとか考え方だとかを身につけることをアイデンティティの獲得と言っています。それが必ずしもうまくいかなくて、初歩の段階で止っている。そしてその課題が達成できると一人の成人として次の段階にいて社会的独立が出来るようになるというわけです。そしてその手前の時期をエリクソンは強調したわけです。

彼は何故そんなことを強調したかということ、自分自身非常に長い間モラトリアム時代を過ごしました。ヨーロッパで何年もうろうろしてその間に医学は勉強したんですけども、芸術に興味を持ってそちらの方で立ちすべきかとか、場所的にもパリにいるかと思うとウィーンに行ったりして非常にさまよった時期があります。そして最後にアメリカに行きまして、アメリカでさまよっているうちにかなりの年になってやっと自分の道を掘んで、その後は一直線に進んできている人です。

そういう経験をもとにそのこのところの大切さを強調しまして、かなり同情的・共感的にその状態を記述したわけです。ですから別に悪い意味で使っているわけじゃない。

日本に入ってきてからはモラトリアム人間等と言われてあまりよくない意味に、次第に変えられてしまったわけです。そういう青年が日本にあまりに多いから、ついそうなんだと思います。日本は留年を繰り返しているとか就職を拒否したり、忌避したりしていつまでも中途半端な生活をしている人の事をそういうふうに使ってまして、本来の心理的な深い意味には必ずしも受け取られていないように思います。

### アパシー症候群

それから次の3番と4番が私は精神衛生問題として非常に重要になっていると思いますし、多くの保健センター関係の方が指摘しておられます。まず3番目のアパシーシンドロームとかアパシー症候群といわれるものです。その一部がスチューデント・アパシーでこっちの方が先に研究が進みましたので、日本ではアパシーというとスチューデント・アパシーを指しているように思っている方が多いようです。けれども、実際は大学生以外でもアパシーになっている人はたくさんおまして、そういう人たちを含めてアパシー症候群というのが妥当だと私は考えています。不登校とその周辺に色々と多様な問題がありまして、その筆頭にこのアパシー症候群が入ってきます。そのうち特にスチューデント・アパシーというのは大学生の登校拒否ということと同じ様に考えられるほど、関係の深いことだと言われてきているわけです。しかしよく見えていますと高校生以下の不登校と大学生のスチューデント・アパシーとは少し違う。大学生の中にも高校生以下の不登校に当たる人たちはいまして、現にアメリカなどではレッジフォビアといいまして大学恐怖症という概念を提唱している人もいるくらいで、スチューデント・アパシーとはちょっと違うものです。

### スチューデントアパシーの特徴

スチューデント・アパシーは、アメリカでウォルターズという人が1970年にその用語と概念を提唱しました。そして主な特徴を、まず男子に限るというんですが、日本では女子にも見られます。ただ数は非常に少ない。殆ど男子学生の問題だと言っているかと思います。そして、2年生ごろに始まることが多い。これは日本でも割り合いそうです。しかし、2年に限るわけではなくて1年からも出ますし、3年4年からも出る人はいます。どの大学も該当する人が非常に増えてきています。

2番目の特徴は、心理的な何等かの原因が必ずある。この辺が他の精神障害、特に精神分裂病などは因果関係が必ずしもよく分からないで発病してくる人もいますが、そういうのとは違って割に因果関係が説明できます。

3番目が学業に関して怠慢、無気力、無関心となり、退却的になる。副業（遊びとかアルバイト）の方はちゃんと出来るんだけど本業（大学の勉強）の方が出来なくなるのが特徴です。だから学生の中には大学には毎日の様にやってきてクラブ活動等は人一倍熱心にやりまして、非常に元気そうに見えるのに授業にはほとんど出ないし、試験も受けないし、留年ばかりしているというような人がいます。これが本来の意味のスチューデント・アパシーの特徴です。

4番目は、退却が学業のみならば治りやすく、生活全般に無気力無関心が向くときは治りにくくて重症であるといえることです。副業的なものも無気力になる人もいと説明しています。本業だけだったら治りやすいけど、全般に及んでいたら治りにくいというのは日本でも同じで、この頃は後者の方が多いですね。

5番目は、その他の困難や敗北面が予想されると闘わずにおりてしまう。勝負がはっきりしているとか、点数でちゃんと出てくるとどうしてもチャレンジできない。競走しないことならたいへんいいわけでボランティア活動なんか非常に熱心で外国まで出て行ってやるような人もいます。

6番目は、男性性の歪みが基本だといえます。ウォルターズの説明はここが特徴で、いろいろな研究者に影響を与えています。男性性の歪みというのは、男性としてのアイデンティティが不十分なし、かなり障害されているというわけです。女性に対して成熟した関心や愛情を抱くことが出来ずに非常にマゾヒスティックな態度をとったり、粗暴であったり、女性に不安を与えるような関係になることが多いといえます。これが基本だというんですね。男性性が欠落していますから、男性性が要求されるような場面がだめでみんなおteriてしまう。

7番目は強迫症状を伴うことが多いことです。妙にこだわって、いつまでも鍵をかけたかどうか気にしたり、不潔なことを気にして手を洗ってみたり、活字を読んだりしても細部にこだわりまして、そこからなかなか前に進めないとかいうようなことがいろいろあるというわけです。

8番目は女性にサディスティックであったり、成熟した相互関係が保てないことです。これは6から派生しているわけです。

9番目はとらわれと屈辱体験が引き金になることです。何か恥をかくとかプライドを傷つけられるということがありましてそれがきっかけになってだんだんこういうことが始まります。そうなるともたよけい傷ついたりつまずいたりしますから、更に悪循環が起きていきます。

こういう状態の事をウォルターズが初めて詳しく記載をしまして、アメリカの大学生にしばしば見かけるといったわけなんです。類似のものをヨーロッパで調べますと、ドイツのランゲンがウォルターズより2年ほど前に似たような特徴の学生を記載しておりまして、強迫症状の持続とか無気力だとか拒否的反応、性のアンバランスなどが見られるとしています。性の歪みを指摘する点では欧米が共通しているわけです。少し遅れて日本で研究が出はじめているんですが、この問題に関しては欧米と殆ど似た時期に類似の症例が現れはじめました。ちなみに登校拒否の方はアメリカで最初に報告されたのが1932年で日本で報告されたの

が1958年ですから30年近くタイムラグがあったんですけど、こっちの方は非常に接近しています。その間に日本の社会が非常に変化したことが大きいんじゃないかと思います。

#### 日本的なスチューデントアパシー

日本でこの問題に早くから取り組まれた人が東大の山田和夫先生や、名古屋大学の笠原嘉先生で、山田先生は長く保健センターにおられたドクターで、そういう立場でたくさん学生を扱ったものですからまとめたわけです。笠原先生は名大であまりに留年者が多いということでその実態調査をされました。調べる中から特徴的な学生の一群がいる、欧米で言っているスチューデント・アパシーに該当するんじゃないかということで色々主張しはじめました。

笠原先生の概念では1番目は勝負の決まる競走場面からの選択的逃避、退却。ウォルターズ以来使われている退却という言葉を使いまして、後に笠原先生は退却神経症という概念を出して、こういう人たちを説明したわけです。2番目は勝ち負けに敏感である。3番目はアイデンティティシーキングとからんで起きる、つまりアイデンティティを獲得しようとしてさまよっている間にそれとのからみで起きてきて、これにすこぶる長く時間がかかるといいうわけです。それから4番目は強迫的傾向と回避性の性格傾向とがある。回避性といっているのは重要な場面になるとそれを避けようとしてしまう。その避け方に特徴がありまして、ヒステリー性格と似ています。ヒステリーというのはからだの麻痺とかいろんな症状を呈するわけなんですけれども、疾病に逃避してしまう。それと類似の性格傾向があるというわけです。5番目が異性関係が少ない。6番目が無気力、無感動、無快感の状態で、スプリットの防衛をしている。無気力、無感動になっているというのは一種の防衛規制が働いていて、弱い自分を守るためにあまり感じないようにしてしまう。7番目は男性性に弱点をもつ青年の心理的防衛です。

山田先生は一つは、自己不確実状態が準備状態としてまずあるとしています。始まるのはちょっとしたきっかけで始まるけれどもその前の準備状態がかなりありまして、その準備状態というのは自己不確実状態、つまり自分というものにどこか自信がなくて中途半端な、エリクソンでいえばアイデンティティを求めてさまよっていてなかなか獲得できないでいる状態ということと似た意味だろうと思います。2番目は具体的には強者つまり秀才アイデンティティが学業強迫によって作られた虚像で実は弱者ではないかと迷う状況。エリート大学のそういう学生を見ているとこういう印象を受けるんだろうと思います。表面的には秀才と言われてきているけれども本人は自信がぜんぜん持てない、自分はむしろ弱い人間で勉強するしか能がなくて、それも母親と二人三脚でやっとうまく立回っていて、たまたまそういう大学にいただけで実際は力はないんだと思っている人が結構います。3番目は弱い自分を認めねばならない場から退却して自己確実の受け皿に中間的に留まってしまう、つまり自分の弱さが露呈するようなところの自分でもそれを認めたくないから退却をしてしまう。

4番目は強者アイデンティティを過干渉に推進した親に攻撃性が向かっている。今まで親の考えでやりたいようにされてきて自分は操られてきたというような、どこか恨みや攻撃の気持ちが潜んでいてそれが大学に入ったとたんにはっきり出てくる。親を特に母親を嫌悪する時期がかなり長く続きます。お母さんが電話したってぜんぜん出ませんし、訪ねてきたらけんもほろろに追い返します。たまに夏休みなんかで帰っても（なかなか帰らないんですが）いいたい放題、親が泣いて悲しがるようなことばかりあってそれで溜飲を下げている、こういう人が殆どですね。共通しています。

5番目に静かなアパシーは追い立てられると不安葛藤の強い騒々しいアパシーとなる。アパシーに2種類あって穏やかで静かなタイプとかなり荒れる、家庭内暴力したり荒れ気味の飲んで荒れたりするタイプと両方あって、追い立てられると静

かな方も騒々しい方に変わるというわけです。

6番目は神経症状とかアパシー退却は等価的に相互に移行していてアパシー状態が強まるのと強迫神経症の症状とが相互に関係し合っていて、どっちが強いときはどっちが薄れているとかいうようになっている場合がある。しかし私共が見ている範囲では、アパシーが強くて籠りがちになりますと神経症的な症状、対人恐怖だとか強迫症状だとかそういったものもひどくなりまして、ますます無力化するようになってるのが普通です。それから母性的援助が特に必要である。母親は毛嫌いしているんですけどカウンセラーは我々みたいな男性ではなくて優しい女性のカウンセラーとかそういった人の思いやりとか配慮に喜ぶようなところもあります。

スチューデントアパシーはこういう特徴を持っておりまして、最近は何度もいいますように、引き込む傾向が以前に較べてより強まっております、副業の方もあんまり出来ないタイプが多くなってまいりました。以前のスチューデントアパシーという、動き回っていてつかまえるのが大変で、面接の約束をしても来ない。ほおっておくとますますひどくなるのでなんとか連絡をつけて来てもらおうとするんですが、なかなかつかまらない。アルバイトに行っちゃったり、忙しく動き回るといようなタイプが多かったんですけども、最近はそのようなエネルギーのある人はむしろ少なくなってまいりました。

ところが最近、初めに言いだしたアメリカがアパシーのことを殆ど言わなくなりました。文献を調べても最近ではアメリカから殆ど出ていません。どうしてかと思ってあちらの人に聞いてみますと、ウォルターズが指摘した頃はちょうどベトナム戦争が泥沼状態になっていまして、徴兵忌避とか、青年がヒッピー化して世界中うろろしているという時代なんです。その一環としてこういうアパシー化する人もいたんだけどその後ベトナム戦争は遙か昔の事になったし、無気力化する必要も大して無いので少なくなったんだと説明する人がいます。あれはだからアメリカにとっては一時的

な現象でそう根の深いものではなかったんだというわけです。

一方、日本の方は実に根が深くてこの背景になる事象はどんどん強まってんじゃないかという感じがします。次の大学生以外の他のアパシー、たとえば大学を中退した後とか高校からそういう状態になる人がいます。それから予備校生とか、一旦社会にでたけども仕事を辞めてしまって後、こういう状態になったというような人たちがいるわけです。それをひっくるめて私などはアパシーシンドロームと呼んでるわけです。

通常、無気力化する状態というのは色々ありまして、たとえば鬱状態になると元気が無くなるとか、精神分裂病が長く続いていますと次第に無気力化して何にもしないというようになることもあります。交通事故で頭を強打して後遺症が残って無気力化してしまうというようなこともあります。このように、かなり重篤な精神病で無気力になる人がいて、そういう人の事をアパシーと呼んでたわけです。

最近はそのものももちろんありますけども、さっきから述べていますようなそういう背景のない、いわば心理反応的にこういう状態になってしまう人が増えてきました。そこで、精神分裂病、鬱病などの内因性精神病、頭部外傷後遺症などの器質性精神病などの古くから定義されている精神疾患が無いにもかかわらず、無気力で意欲が無く、物事に無感動、無関心で、無為な状態をきたすものをアパシーと呼んでいて、そういう症状群が長く持続している人の事をアパシーシンドロームと言っております。この研究は欧米にも少しあるんですけど、さっきのスチューデントアパシーと似ていて、あるいはそれ以上に、現段階では特異的に日本の現象といえまして、従って日本で研究が進んでいます。

年齢では、現在のところ20才前後から30代の初めくらいまでの人たちに多いんですが、このまま進んでいきますと、そういう人たちは自然治癒などしない場合がしばしばですから、加齢と共に40代50代の人も増えていくのではないかと思います。

## 摂食障害

一方、女性の方の問題はどうなのかというと、女性の大学生も増えてきているわけですが、その中で筆頭に上げられるのは摂食障害です。Eating Disordersといってるものの日本語訳です。最近ではアメリカの精神医学会がDSMという診断分類基準を作っていて、次々新たな改訂を加えています。現在一番新しいのはDSM-III-Rというものです。

やせ症の方が神経性無食欲症Anorexia Nervosaで、逆に過食をしてどんどん太ってしまうという状態が神経性大食症、通称ブルミア(Bulimia Nervosa)と呼んでいるものです。両方とも増えていましてこれは社会全般に広がっているわけですが、大学生の間でもかなり増えております。但しここは女子学生が少ないこともありましてあんまり本格的な人はいないと、今のところは言えます。

念の為あちらの診断基準を見てみますと、やせ症の方は、Dまで4項目あります。Aは年齢と身長に対する正常体重を維持することの拒否、要するに体重と身長の関係が正常範囲の最低限よりも上、つまり正常範囲に入ることを拒否する、もっと体重が軽くなれないといられない、気持ちの上で満足できない。それからBが体重増加または体重が不足している場合さえでも肥満することに対する強い恐怖をもっている、つまりいくらやせていても太ることに異常とも言える強い恐怖心をもっていて、太るのを嫌がるのは男性も女性も多いですが、その恐れ方がやや極端な場合です。それからCは自分の体の重さ、寸法、形を感じる感じ方の障害、やせているのに自分は太ってると思いついでるわけです。それからある程度やせると認める場合でもどこか首が太いとかやれ足がどうだとか、部分的にお腹が二重腹だとかぜんぜん現実と違うことを言いついて、そういう体の客観的なバランスとかプロポーションに関して感じ方がずれちゃってるわけです。それは決して大きさにいってるわけじゃなくて本人は心からそう思っているのです。相当に妄想的なんですね。それか

らDが、女性では他に理由無く、あるべき月経周期が少なくとも連続3回欠如すること（原発性または続発性無月経）。普通はズーッと止ってしまいます。やせ症の回復と医者が判断する時も基準が色々ありますが、その一つはメンスが再開するという事になっているくらい、早くから無くなってしまう。

これがやせ症で、若い女性の場合はこちらが普通であって、通常思春期に始まり30代ぐらいまで続くことがあります。20代ぐらいでだんだん薄れていく人も、もちろん治療などによって早めることはできます。しかし、Cなどの様な感じ方はかなり長く、相当に太ってきた後も残っていることがしばしばあります。

2番目の過食症。ここでは5つも項目がありまして、プラクティカルに定義されています。Aは無茶食いのエピソードの反復がある。Bは無茶食いの時間中、摂食行動を自己制御できないという感じがある。Cは患者はいつも体重増加を防ぐために自己誘発性嘔吐、下剤や利尿剤の使用、厳格な食事制限または絶食、または激しい運動を盛んにやっているのが普通だと。しかし、なかなかうまくいかない、自己嫌悪に陥ってまして心理的にはいつも不安です。Dは少なくとも3ヵ月間に最低1週間に平均2回の無茶食いのエピソードがある。無茶食いというのは本格的なものは相当すごくて、信じられないくらい食べます。食べている様子などを家族が見ますと、大抵夜中にみんなが寝静まった頃に台所などに下りてきまして、冷蔵庫の物を片っ端から食べられるものはみんな食べてしまう。それがもう鬼の形相で、お母さんなどは驚いてしまって、これが我が子かと思って恐ろしくなったと言うほどすごい人がいます。Eが、体の形や体重についての関心のありすぎが持続しているというようなわけです。やせ症の方は早い人は小学校の上級生から、普通は中学前後に始まりまして、遅くとも高校ごろに始まってその後ズーッと続いているというのが多いんですが、プリミアの方はもうちょっと後にずれて早くても高校生、普通は20才ぐらいから始まって30代というよ

うに後ろへもうちょっとずれているのが普通です。

それともう一つの特徴は鬱状態の人が多くて鬱状態との関連が深いとされています。これは大学生の頃から始まってその後が続いていくというのが多いんじゃないかと思います。これは鬱病と関係がありますからそっちの状態を続かせますと割に無理なく過食の方が減ってきますので、やせ症に比べるとやや扱いやすいとも言えます。しかし本人は圧倒的に過食症の方が苦しいわけです。前者の方はあんまり悩んだりしませんで、回りが悪いと思ってるわけですから、自分の考えを理解しない親や回りがおかしいと思ってるわけです。

### その他の問題

他には特に最近各大学で問題になっていますのは留学生の方のいろんなメンタルヘルス上の事です。大学や日本の社会や文化になかなかなじめない、その結果いろんな問題が起きてくる。

それからさきほどちょっとお話ができました自殺の問題は各大学にとって最も深刻で重大な問題で、それをどう防ぐかでいろいろ工夫しているわけですが、それはいろんな場合に起きうるわけなんです。以上あげたような場合でも起きますし、もっと別の精神障害でも起きまして大抵大学生の場合は何等かの精神障害とのからみが見られることが多いと言えます。ただその発見が遅れているうちに死なれてしまうということもありますので注意を要します。保健センター等に通い始めるとなんとかケアできて防ぐことが出来るんですけど、来る前とかそれから盲点になるのは長期の休みの時です。夏休みとか春休みとかの時に目が行き届かなくなりますし、そういう人に限って家に帰りません。たいてい下宿等にぶらぶらしててそのうちに亡くなっちゃうということがよくあります。

### 【質疑応答】

唐木：五月病は最近無くなったといわれましたが、12月病というのがいわれてきていて、症状は同

じ様なもので時期がずれただけという議論もありますけど、その辺はどうなのでしょう。

稲村：そういう説も相変わらずあるのと、筑波では9月病とっています。何故かというところあそこは3学期制で、古い大学は夏休み明けに試験がありますね。ですから緊張しているわけですけど、試験も無いわけで夏休みでぼけてしまってそのまま大学に来ますと、なかなかじめなくてぼやとしていて、9月ごろに妙になる人が多いものだから筑波は9月病が問題だとかいっております。そうじゃないところはきっとそれがちょっと後ずれで暮ごろとかになっていくんじゃないかと思えます。要するに学校のサイクルと行事のサイクルと多少関係しているんじゃないかと思えます。

早川：学生に生活基盤、家から通っているものと下宿しているものとの違いはありますか。

稲村：それは対策上大問題で、そういう意味の違いは大分あります。まず発生しやすいかどうかに関しては、さっきあげた3（アパシー症候群）とか4（摂食障害）はいずれも一人であるほうがより進みやすいですね。それだけ例えば3の場合ですと自由度が高いですから勝手な生活をしているうちにリズムを乱してしまって、どんどん悪循環してしまう。4の場合も極端に食べないとか、過食していても誰にも分かりませんからどうしても歯止めがきかない。家族がいるとなんとなく気がつくということがあります。

早川：もう一つは友達関係で、その関係の濃淡というものが現れているのかどうか気になっているのですが、特徴的なことはありますか。

稲村：特に3（アパシー症候群）等はそうですけども、部活等を盛んにやる人はそれなりに交遊があるわけです。そっちも次第に出来なくなる、副業も生活全般が無気力化してしまってこもりがちになるようなタイプですと少々友達がいても寄せつけなくなってしまいますので、結果的に孤立無援状態におかれてしまう。その上家族にもそうやって遮断してしまいますからつながりが無くなってしまふわけです。その辺が対策上大変になってくると事態の深刻化につながりやすい。まだ

県人寮などにいる人はいいんですけど、いわゆるアパートで全く独立したところにいる人ですね。そのアパートに友達が何人かいるようだといいんですけど。大学院で別の大学から入ってくる人がいますね。そういう人たちは五月病というものもあるし、さっきの9月病的なもの、いろんなものが出やすいですね。ここで見ていたり、東大の時もそうでしたけど女子大学を出てから大学院に来る人がいますね。そういう人たちは得てして、あるいは女子高校を出て女子の少ない大学へ入ってきた人は割に最初に5月前後にいろんな不適応状態になりやすいですね。

村瀬：バーンアウト、“燃えつき”ですね、燃えつきとアパシーというのは共通しているのかしていないのか。

稲村：一部共通しています。一つは登校拒否遷延型のアパシーともう一つは虚脱型ないし荷下ろし型とっているものです。後者は長い間散々苦勞して受験勉強してやっと入った、そうするとほっとしてやれやれとおもって虚脱状態に陥る。そうしているうちに次第になっちゃうというように燃えつきてしまってアパシーになるわけです。これは大学生にもいますがむしろ予備校生、なんかで頑張ったのに受かると思った大学が受からなくてまた予備校だと、消耗してエネルギーが出てこないというか、燃え尽きちゃったようになる。そういう人もいます。それからもう一つがいわゆるモラトリアム型のアパシーで、社会に出ていくのを拒否して、回避しているうちに次第に無気力化していくとか、色々分けられます。

内海：学生にクラブとかサークルに出来るだけはいって人間関係をもむことが重要だということや、がまんして人間関係で耐えろといったり、それともう一つ、親から努力して自立しろというんですが。学生に聞くと自分が親から自立しているというのは3割いないんですね。自分の親が自分から自立しているかということも同じく3割くらいしか手を上げないですね。7割くらいが相互の癒着というんですかね、それがあっているかどうかというのは確信がないんですけども。

稲村：それは一般の多くの学生にはその方がいいと思うんですね。受験というのも殆どお母さんが密着していてレールをしいて、やれ家庭教師だやれ塾だ予備校だと一緒に歩いてきていますから、大学に入ったのを契機にお互いが分離して自立していくことを図るべき年齢段階だと思うんですね。そういう意味では非常に必要なことで、私などもなるべく一般の学生にはそういってるわけなんですけど、一部そういうのに耐えられない人がいるわけですね。そういう人を早目に見分けて個別の対応をしてあげるとか、きめこまかい配慮をする、などの必要がある。だから並列してやる必要があるんじゃないかと思います。

藤田：アメリカでは若者のアパシーが殆ど問題にされなくなってきた、日本の場合むしろエスカレートしているという、その社会状況の違いに触れて下さったんですけれども、日本でエスカレートしている社会的要因とか背景をどのようにとらえておられるのか教えていただきたいのが一つ。もう一つは、アパシーに陥ってしまう学生たちのケースとして、例えば女子高校から男子の多い大学へ入ったとか、留学生のカルチャーショックの病的な現れなど、一種の不適応状態ともとらえられると思ったんですね。その時の共通な問題とは何か、カルチャーショックに変わることで理解するとすれば、どのように理解したらいいのかということをご説明いただきたいと思います。

稲村：おっしゃるように日米はかなり差があって、子育てのし方から社会の環境条件から違いはかなりあると思います。日本の方であらゆる問題が低年齢化していてこのアパシーも下にさがっています。例えば非常に端的なのは、文部省の不登校の分類で無気力型といってるのは以前は少なかったんですけれども段々に増えてきて最近トップです。そしてそれが小学生までそうになってきまして、つまり日本はもう小学生の段階から無気力的な傾向が強まってきていると言えると思うんです。いまの子育てとか教育のあり方が子どもたちを抵抗力のないひ弱な状態に一面ではしているし、一方では追い詰められて逃避せざるをえない状況が強

まっている。受験だとか成績だとか、ブランド志向的な進路志向などのいろんな考え方とか、あるいはもっと大事かも知れませんが人間の生きる目標とか、生甲斐ということに対する力強さのようなものが失いかけているのじゃないかと思うのです。その上に、この頃は不登校だのアパシーだの社会的に認知されてきていますから、休んでもみんなあまり驚かないし、大事にしてくれるわけですね。学校なんかでも非常に大事にしてくれて、以前だと非難されたり肩身の狭い思いが強かったと思うんですけれども、最近はずっと暖かく理解してあげようというのが学校の雰囲気でもあるし、社会やマスコミにもある。認知されちゃったわけですから、子どもはちょっといやになってきだすと安心して休んでしまう。それから家にいた方がずーっと面白いわけで、ゲームはあるしその他いろんな物に囲まれているわけです。家庭での楽しみと学校での楽しみと相対的な違いが以前は学校の方がやや引力が高かったんだと思うんですが、それが今は逆転してきてるんじゃないか。そういうあたりが複雑にからんでいるんじゃないかと思うんですね。

それからあとの方に言われた女子高から来た場合の不適応、留学生の場合の不適応とかは、これは要するにそれまでの慣れ親しんだ環境とか考え方とか感じ方とかが急に通用しない社会になったわけだから、おっしゃるようになかなか適応できなくてそこでぎくしゃくする時期がかなりある。ある程度あるのは仕様がなくて、それを克服することでより適応力が強まっていくわけです。必要なことでもあると思うんですけどそれに耐えがなくなってしまうとノイローゼ気味になったり鬱気味になったり、それから女の人だとやせ症の方へいたり、男はアパシーにいたりというようなケースがままです。そういう場合は早目に気がついてそれには個別のケアをする体制を初めからそういう女子高だの留学生だのに対して先生方ももちろんだしわれわれも含めて配慮していくことが大事かと思います。

高津：アパシーが学生から社会人へと拡大し始め

たのはいつごろかということと、その問題と終身雇用制が再検討され始めたという状況と対応するのか、あるいはむしろそれにより適応しようとして出てきたのか。

稲村：具体的には論文が出だした1980年代の後半だと思うんですね。もちろんハシリのにぼつぼつと社会人の間でも出ていたわけですが、出勤拒否だとかアパシーシンドロームなどよりアパシー的になるとかする人が割合目立ってきたのがその頃で、それがさっき言われた会社の方の条件と該当するかどうかです。ケースを一人一人見ているとそれぞれ少しずつ違う背景がありまして、今言うようなことで説明できる人と、もっと別の理由がある人というようです。だからケースだけからだと分かりにくい面もありますから、統計的な数の変化とそういう社会状況の変化とを突き合わせてみるともっと分かるかもしれません。

藤田：日本が企業社会化していく、ある意味で企業社会として成熟していく1980年代以降に、比較的若い社会人層にアパシーが出てきたようだけれども、企業社会というものがメンタルなものにダイレクトに影響するというよりも、もっと複雑な要素を持っているようだということをおっしゃったと思うんですけども、先生のご経験からすると、アパシーが学生層から青年層とか大人一般の方に広がっていったその広がり方というのは、80年代の企業社会化していくような動きとどのような関連にあるんでしょうか。

稲村：かなりパラレルでしょうね。はっきり増えてきたのは80年後半からですから、その動きとパラレルかも知れません。

藤田：そうしますと、どうも私は今の日本社会の中にある「管理」と「競走」ということが問題の共通したカテゴリーになってきているような気がしたんですね。例えば、一時の過保護とか過干渉も一種の家庭の中に置ける管理の形態ですから。それから学校の中でのさきほどのバーンアウトと言うのがありましたが、じつはバーンアウトと同時に不完全燃焼も同居している。即ち今の若者は、一方で入試競走の中でバーンアウトしているよう

な学生がいる訳ですね。ところが他方でそれにかり立てられていてアイデンティティを獲得していくという意味では非常に不完全燃焼のままきていて、もっと低学年の時代に悩まなければならないことをやっと大学生になって悩んでいる、というような指摘が教育学者の中にもあるんですね。そうするとバーンアウトしながら、一方で不完全燃焼している、そういう複合的なものが子どもたちや青年の中にある。そんなことがずーっとサラリーマンになる年齢まで引きずっている、そんなふうに今のお話を伺いながら感じたんですけどもそんな見方でいいのかどうか。

稲村：おっしゃるとおりです。このバーンアウトになれた青年はまだいいほうです。疲れちゃって人はしばらく静かにして力が甦ってくる。甦ってくれば非常に元気になるわけですからこっちの方はいいと思うんですね。不完全燃焼の方が多分非常に多くて、学生はこっちの方が問題ではないかと思うんですね。それは不登校の学生を見ても非常にそういう人が多くて、各発達段階を充分やっていない、遊ぶときに遊んでいない、遊べていない。それを更に考えると社会的な場とか機会を提供することに今の社会はうまくいってない面があるんだろうと思うんですね。スポーツならスポーツで何か目標があって、甲子園とかサッカーとかなんかが出てくるとワーと熱狂してね、かなり燃焼するわけで、燃焼したいのにするものがないというあたりがかなり重要じゃないかと思えます。そういう機会をどうやってうまく与えて上げられるか、治療的対策をするときも、落ち着きだして復帰する段階ではそういうものをうまく工夫して提供する。自分さがしをさせてそれが見つかっていくと燃焼する材料が見つかってきますから、燃焼しだすと勢がついてくる。特に男性はそういう感じがします。アパシーが男性に多いというのはアメリカの初期の人たちが説明したような面、すなわち男性性の問題もあると思うんですけど、男性にとって燃焼する手頃なものが無くなっている社会状況もあるような感じがします。

唐木：正常と不正常の間のどこに線を引くかとい

う話なんですけど、われわれが見ている学生が運動部に非常に熱中しているけれども授業は出席を取るだけで、あとはやる中味については関心を持たないみたい。そして出来るだけ優しい授業をのきなみ取って、やる気があるんだがないんだかわからない、けれども先生が言われるような人でもないというような、症候群とそうじゃないものとの線を引きにくいように思うのですが、なにかメルクマールがあるんでしょうか。

稲村：今その辺が医学の場合も非常に問題になってまして、ポータレスの時代はまさに医学などは矢面に立っているところじゃないかと思えます。体の方でもそうでね。中間状態というのがいっぱいいて日本人などはあらかた半病人みたいにどこか悪いようでもあるし、そうでないようでもあるし。そういう状態の方が増えていると思うんですね。心の面もまさにそうで、心の方は定義はいろいろしているけど、どっちとも言いにくいケースというのはいるわけです。その度合いが広がってきていると思うんですね。それが更に広がると一般の学生にもそういう要素が少しづつ誰にでもある。なるべくエネルギーを使いたくなくて楽にして好きなことだけしたい、それはある意味でいうと要領がいいんだけど、ある意味でいうとエネルギーが不足している。途上国の学生を見ると、例えば講義の途中で「はいはい」といってすごい質問をする。日本の学生はまずめったに質問なんかしてくれない。何か目標とかある種のエネルギー、目標に向かって使命感を持ってエネルギーを燃焼させようという勢がかなり落ちちゃっている姿じゃないかと思うんですけど。

高津：日本では一芸に秀でることがありますが、スポーツならスポーツに夢中になっている、あるいは勉強なら勉強というそういうかたちで達成感を感じて自分をさがしていくという生きかた、あるいは勉強でもスポーツでもどちらにも取柄はなかったんだけどそのバランスの持ちかたの中で自分をさがしていくという生き方、精神衛生上からいってこういう形での達成感というのがあるのかどうか。

稲村：最近の学生ないし若い人たちの自分さがしといってる意味は、エリクソンのアイデンティティシーキング、つまりアイデンティティを求めてさまよっている。自分は今までレールにのって大学へ来たけれど一体これでよかったのか、もっと別に自分らしい生き方があったんじゃないかとか、そこいらがちゃんと整理できないと前へ進めないわけなんですね。そういう意味の事ですから、一芸に秀でるとか、あるいはもっと精神のバランスや人間関係のバランスなどというのは先のステップだと思います。それ以前の人が意外と多いという感じなんです。もちろん学生差がありますから、先生のおっしゃっている意味の自分さがしにもかかっている人もいるでしょうし、エリクソンなどは40近くにもなってやっと獲得したといってるわけだから。そういう意味ではもっと進んだアイデンティティだと思います。

内海：モラトリアムは欧米からということですがけれども、最近の東南アジア諸国の教育制度を見ると日本以上の競走社会ですね。そういうところでの成長過程の人格異常というのは日本以上に進んでいるのではないかと思うんですが、そのあたりいかがでしょうか。モラトリアムというのはある一定の豊かさの上での競走のみの突出した状態なのか、あるいは日本でも60年代は70年代と比べるとハングリーな競走でした。そのあたりはあまり言われなくて70年代80年代以降にいわれるというのは、経済的基盤と競走の関係というのはあるのでしょうか。

稲村：日本で60年代に味わったような意味の過度な教育熱心、受験・教育競走などは、韓国を始め東南アジアはのきなみそうなっています。すさまじくてアメリカ大陸へ渡っている人たちの間でも、すごい勢であちらの大学に入っていて成績もいいし、という人が増えているようですけど、今度、あちらもそうなるかも知れませんが、但し宗教的背景だの思想的背景だのいろんなのが違いますから、日本みたいにならないかも知れませんが、ちょっと分かりにくいですね。